

『広辞苑』の編者で知られる新村出に「雪のサンタマリア」という美しい随筆がある。1603(慶長8)年の雪の聖母の記念日(8月5日)に死んだ、無名の日本人男性の墓碑

# 歴史の文差点

神田外語大学客員教授 山内昌之



から話を説き起し、真夏に雪が降った夢を見た教皇と信徒夫婦が、積雪の場所に教会を造った麗しい縁起話を日本文化史に位置付けたもの

の序文も付されている。潜伏キリシタンの歴史的作用と文化的価値を日本国印度副王信書の息を呑むほどの位置づけられた点で、カトリック史のみならず日本史研究にも貢献する本格的な出版物となった。やや高価な

# 雪のサンタ・マリア

で、大学や公共の図書館でぜひ一般読者の閲覧に供していただきたい。感心するのは、著名なキリシタン史料が文書を含めてかなりカラー化されたことだ。聖フランシスコ・サビエル像「南蛮屏風」「天正遣欧使

ンには欠かせぬものだった。聖母子と二聖人(ロヨラとザビエル)が描かれる絵や、個人蔵ながら、髷を結った和服姿の洗礼者ヨハネがヨルダン川畔を歩く姿を見て不思議な感慨を抱く人も多いだろう。板や銅や真鍮で作られた踏み絵の数々も今では恩讐を超えて、潜伏キリシタンの存在を後世の日本人に伝える重要な財となっている。徳川家康に仕えながら棄教を承諾せず新島・神津島に流された「シユリアおたあ」の絵、蝦夷地(北海道)をはじめ、北方世界の情報を伝えたイエズス会のアンジェリス神父の地図などは、近世文化史の貴重な史料でもある。津軽家当主たちの木像や絵像、「松前屏風」などキリシタン史料でない美術品も収められている。他方、長崎・外海の潜伏キリシタンが信仰した雪のサンタ・マリアの絵は、和風の掛け軸に収められており、その古雅なたたずまいには感動する以外に言葉もない。そして、新村出の紹介した「聖マリアの雪殿」や「ゆきのサンタ丸や」なる和名の奥ゆかしい響きを知る者にとり、この「図譜」で雪のサンタ・マリアの絵を、彼女の昇天した暑熱の8月に鑑賞できるのは、この上ない涼味といふべきではないか。(やまうち まさゆき)